
今日からマのつくSOS団！

マ王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日からマのつくSOS団！

【Nコード】

N4372L

【作者名】

マ王

【あらすじ】

ある晴れた秋の日のこと。

ハルヒは珍しく読書をしていた。

静かでけっこうなことだと楽観視していた俺だったが、他の三人にとっては無視できない事案らしい。

古泉によると、俺たちは異世界に飛ばされる可能性があるとのことだ。

ハルヒの変態性を知りつつも今まで異世界というワードに関わりがなかった俺としては、にわかには信じがたいことだった。

何も起こるまいなどと高を括っていたが、そうはハルヒが卸さなかった。

どうやら俺は、ハルヒの能力を過小評価していたらしい。
まさか、あんな世界に飛ばされることになるとはな……。

第1話 読書の秋に決まってるわ（前書き）

この作品は『涼宮ハルヒの憂鬱』と『今日からマのつく自由業！』のクロスオーバーです。

二次創作、クロスオーバーが苦手な方はお引き取りください。

第1話 読書の秋に決まってるわ

ある晴れた秋のこと。俺は、ようやく過ごしやすくなった気候と夏の疲れもあつて眠気を感じながら、ボーッと考えていた。

秋と言えば何か。よく「○○の秋」と言うが、どれが一番メジャーなのだろうか。そんなどうでもいいことを。

「スポーツの秋じゃないでしょうか。この時期は運動会などもありますし、運動するには最適の時期ですからね。あなたも何か運動を始めてみてはいかがですか？」

古泉が疲れも眠気も感じさせない表情で爽やかに答えた。

確かに動きやすい時期ではあるが、俺はいつも「ハルヒに振り回される」という、ある意味最も過酷なスポーツをしているから運動は必要ない。ダイエットしたい人は俺と変わってくれ。

「えっと、食欲の秋でしょうか？ 秋はおいしいもの多いですよね」それはどちらかと言うとハルヒや長門の管轄だが、朝比奈さんに食べられるなら食材達も本望だろう。

あ、お茶どうも。今日もおいしいですよ。

「芸術の秋。もともとは二科展、日展、院展が秋に開催されることから『美術の秋』と呼ばれていたのが、転じてそう呼ばれるようになった」

その何とか展つてのが何だか分かんのだが、俺としては言葉の由来より長門がそれを選んだことの方に疑問を感じる。

長門と言えば……、

「読書の秋に決まってるわ」

そう、それだ。

現に今もいつものように定位置で、俺には理解出来そうもない本を読んでいる。にもかかわらず、それを言ったのは長門ではなくハルヒだった。

ハルヒは珍しく本を読んでいた。もしかして長門は、ハルヒが言

うであろう秋の代名詞をわざわざ残しておいたのだろうか。

だとしたら、長門に気を使わせるなとハルヒに言っただけでいいところではあるが、俺も人のことは言えないし元々ここは文芸部だ。こいつがこうやって大人しく読書している分には俺達も右往左往することもないだろうから、文句をつけるつもりはない。

「そうとも限りませんよ」

「顔近いぞ。何が言いたい」

「お気付きでしょうが、このところ涼宮さんが読んでいる本はファンタスティックなものばかりです。何も起こらないこの世界に飽き飽きしてしまったのでしょうか」

「ただの現実逃避だろ。あいつの気が済むまで読書させてやったらいい」

「言っただけでしょう？ 彼女には願望を実現する能力がある、と。もし彼女が読んでいる話の中に彼女の気に入る世界があったならば、まだ現れていない異世界人に彼女自身になってしまふ可能性も否定出来ないですよ」

異世界人か……。それに関しては俺もずっと気になっていたのだが、実際のところ存在しているのだろうか。ハルヒのあの強烈な自己紹介を思い出す限りでは、いてもおかしくない、と言っただけでいい方がおかしいと思ってしまう。

まさか、古泉が言うところの神であるハルヒは、異世界人第一号にでもなる気なのだろうか。欲張りだな。

「今までのパターンから考えれば、向こうから来る可能性の方が高いんじゃないのか？」

「確かに僕らのような前例を考えればその可能性もありますが、考えてもみてください。向こうから異世界人が来るのと涼宮さんが向こうに行くのと、どちらがより不思議な体験を出来るかは明白です。今まで涼宮さんが、自らが宇宙人や未来人となって銀河の果てや過去に行く、なんてことをしなかったのは……前にも言ったと思いますが、やはり彼女の常識が邪魔しているのでしょうか」

「だったら、異世界にだって行かないんじゃないのか？」

「確かに、少し前の涼宮さんならそう言い切れました。しかし、このところの涼宮さんの精神は……はつきり言ってしまうえば、今までにないくらいに荒れています。正直、今の彼女がどこまでの力を発揮するのは未知数です」

「ようするに、今のハルヒは何をしですか分からないから、小説に影響を受けて異世界に行っちゃう可能性もあると、そういうことだな」

「それで済めばまだいい方でしょう。下手をすれば、この世界そのものが向こうの世界とすり替わる可能性もあります」

それだけは断固阻止せねばなるまい。俺に出来ることなど高が知れているが、いざという時ハルヒを止められるのは……少なくともこの中では俺しかないからな。

そんな俺の心と呼んだかのように、古泉は表情を戻し話を変えた
「そして、あなたが先ほどから気にしていたであろう長門さんの言葉ですが、おそらく『読書の秋』という言葉は涼宮さんより先に言うことで彼女の心を乱さないための配慮でしょう。そうですね？」

「……そう。情報統合思念体は、今回の涼宮ハルヒの行動に関して慎重な対応が必要と判断した」

「わたしも禁則事項で未来と連絡を取ったんですが、現在の涼宮さんは禁則事項なのであまり干渉しないようにと言われました」

相変わらず何が言いたいのがよく分からないが、ものすごく重要な事だというのは分かった。

俺もとりあえず静観を決め込むことにした。変に干渉に余計面倒なことになるそうだからな。

この時、ハルヒの読書を止めなかったことを後悔することになるとは知る由もなかったのだ。

第2話 ここって異世界よね!?

今日も今日とて、ハルヒは長門と化している。

今日読んでいるのは、「今日からマのつく自由業!」というライトノベルだ。俺も読んだことはある、というか読まされたから大体的内容は分かる。

ハルヒの力が発動した時に予備知識があつた方がいいと言うことで古泉に読まされたのだ。

部室にある本は、貴重な睡眠時間を削って半分近く読んだ。幸いなことにハルヒは面倒くさがってライトノベルしか読まないの、長門がいつも読んでいるような殺人レベルの分厚い本を読む必要はない。

ちなみに長門は言わずもがな古泉も既に半分以上読破し、朝比奈さんは三分の一も読めていない。最近は毎日こんな感じで、図らずも文芸部らしい部室になっている。読むだけだが。

ふと、顔を上げたハルヒがこんなことを言ってきた。

「ねえ、キョン。ちよつとトイレに顔つつこんでくれない?」

……これを本気で言っているのだろうか。

原作通りならそれは女子トイレだ。顔をつつこむ以前に、女子トイレに入った時点で俺の高校生活は崩壊したのも同然である。

「待て、ハルヒ。言わんとしていることは分かるが、何も女子トイレじゃなくても……」

思えばこの会話がネタフリだったのかもしれない。

その後大人しく読書をしていたハルヒだったが、帰り際になって突然目を輝かせたと思うと、満面の笑みでこう言った。

「プールに行きましょう!」

……そう来ると思つた。

「待て、ハルヒ。今は秋だ。プールなんて……」

「何言ってるの。室内プールがあるじゃない」

いや、そんなことは分かっている。諦めさせようとあえて分かっているフリをした俺の努力を無駄にするな。

長門は相変わらず何も言わないし、朝比奈さんは事の重大さが話かっっていないらしく「いいですねえ」と珍しくハルヒの提案に賛成している。賛成するのが規定事項の古泉は、

「いいんじゃないでしょうか。ちょうど、僕の知り合いが経営する屋内プールが先日オープンしたばかりですし」

相変わらずのグッド……いや、バッドタイミングだ。そろそろハルヒも古泉の交友関係に疑問を持つべきではなからうか。

まあいい。どうせ馬の耳に念仏、ハルヒの耳に異議だ。

と言うことで次の日曜に近所の室内プールに行く運びとなった。

そのプール大丈夫なのか？

「今のところ異常は認められない。私たち全員がプールに入ることがトリガーになると思われる」

長門は何が起こるかまでは教えてくれなかったが、起こるとすれば間違いなく異世界へのスターツアーズだ。酔いそうなところは朝比奈さんの時間移動に似ている。今のうちに酔わないコツでも教えてもらうか。

「コツですか……？ 私は慣れているので酔いせんけど、コツと言われても……。慣れるしかないんじゃないでしょうか？」

すいません、慣れたくありませんので今回は我慢します。

そんなこんなでやって来た近所のプール。

今日は八人の大所帯だ。八人と言うのは、SOS団＋妹＋鶴屋さん＋国木田だ。あれ？ 九人いるように見えるが気のせいかな？

「おいおい！ 主役を忘れるなよ！ 俺がいなきゃ始まらないだろ！」

ああそうか、谷口もいたんだった。すまん、忘れ物はお前の専売特許だったな。

ちなみに妹は例のごとく「私も行くー」の一声でちゃっかりと自転車の後ろに陣取り、鶴屋さんは朝比奈さんが誘ったらしい。

まあここまではいいとして、問題は残りの二人だ。下心丸出しの谷口が「プールが俺を呼んでいる」とか言っつてついできたし、もはや谷口の付属物と化した国木田も当然のようについできた。普段のハルヒなら国木田はともかく谷口が眼福にあずかることを良しとしなかっただろうが、生憎今のハルヒはスターツアーズのことで頭がいっぱいのようなのだ。プールに入るや否や排水溝を探している。

排水溝の位置を確認したハルヒは、待っていても退屈だと朝比奈さんと鶴屋さん、妹を連れて遊び始めた。

谷口はプールサイドでナンパする算段でも付けているようだ。国木田、そっちはダメだ。よく言うだろ？ 知らない人と谷口にはついて行くなつて。

とりあえず、俺はここで静観を決め込ませていただく。

「長門。お前は確か『全員がプールに入ることがトリガーになる』と言ったよな？ と言うことは、このまま俺たちが入らなければ何も起こらないのか？」

俺の右隣で、水飛沫を浴びても何故か濡れない本を読んでいる長門に聞いてみたが、答えは左から返ってきた。

「その解釈で間違いないと思いますが、涼宮さんがそれを許してくれるとは思えませんね」

やれやれだ。今のうちに準備体操でもしておくか。

と腰を上げると、古泉がニヤニヤと笑っていた。

「何がおかしい」

「いえ、あなたも丸くなったなと思ひまして。以前のあなたなら、この場で素直に準備体操を始めるなんてことはなかったでしょうから」

「丸くなったとは心外だな。ただ悟ったのさ。どうせ何を言っても

あいつは聞きやしないのだから、言っても時間と体力を無駄にするだけだつてな」

「それは困りますねえ。涼宮さんはあなたには、文句を付けつつも最終的には味方になってくれる、そんな役どころを期待していると思うのですが」

俺はハルヒ超監督様のお眼鏡に適った覚えはないし、あいつにとつて本当に必要な文句の一つも言つさ。でないといつは将来、類まれなるダメ人間になっちまう。

俺の無言の意思表示をどうとらえたのか、古泉の表情はいつもの似非スマイルに戻っていた。くそ忌々しい。

「俺にばかりその役どころを押し付けしないで、お前もたまには反論の一つでもしてみたらどうだ」

「恐れ多いことです。この世界の一部に過ぎない僕が、神に逆らうことなど許されるとお思いですか？」

言っている事が矛盾している。俺だつてこの世界の一部に過ぎないのに逆らつてもいいって言つのか。

……と思つたが、これ以上押し問答を続けても無意味だ。俺は黙つて準備体操を続けた。

昼頃になつてハルヒたちが戻ってきた。

ハルヒは戻ってくるなり、お昼にしましょうと息巻いている。どうやら準備体操はまだ早かつたようだ。

だが、昼飯を食つた直後にスターツアーズというのだけは勘弁願いたい。もしハルヒがそういうつもりなら、せめてエチケツト袋くらいは支給してほしいものだ。

そんな俺の願いを込めた視線を軽くスルーしたハルヒは、何やら朝比奈さんを急かし始めた。急かされた朝比奈さんは、どこからともなく大きなバッグを取り出し、

「あの、これ私を作りました。お口に合うかは分かりませんが……」
と、自身なさげに言つた。貴女の御手が生み出したものなら、た

とえ庶民派の料理でも五つ星レストランの高級料理以上です！

谷口も同じような考えなのか、やたらと興奮している。

「うひょー！ 朝比奈さんの手料理！ 百回、いや千回噛んで食べます！」

こいつに朝比奈さんの手料理を食べさせるのは些か以上に不満なのだが、

「本来SOS団しか食べることが許されていないみくるちゃんの手料理を、特別にあんたにも分けてあげるんだからね！ 一万回は味わいなさい！」

「たくさん作ってきたのでどうぞ食べてください」

朝比奈さんの手料理がSOS団専用に使われていたなどと言うことは初耳だが、朝比奈さんがこう言っているのだから谷口とて無下には出来まい。

十萬回噛み締めるがいい。

朝比奈さんの手作り弁当はあつという間になくなった。

古泉や国木田、そして朝比奈さんは遠慮しながら食べていたし、谷口はあごが痛くなりそうなほど噛み締めていたが、相変わらずハルヒと長門のペースが尋常ではなかった。恐らく、二人で半分ほど平らげただろう。

にもかかわらず、ハルヒは満腹感など全く感じさせない様子で長門と勝負を言い出し、読書中の長門を引っ張ってプールに向かった。

食後すぐの運動は……と言いたところだったが、長門が去り際に俺の方をジッと見ているのに気付いてそんな気は削がれた。私が時間を稼ぐからその間に休んでいて、とでも言いたそうな表情だ。長門検定1級の俺が言うのだから間違いない。

そう言うことならしばし寝させてもらおう。最近寝不足だからな……。

「……ん、……くーん、……ンくーん、キョンくーん。起きてー。
ハルにゃんが呼んでるよー」

俺はどれくらい眠っていたのだろうか。少し頭が重い。いつものようなボディプレス目覚ましでないだけマシだったが、寝覚めは最悪だ。

そして、妹に促されるままプールを見た俺の頭は更に重くなった。
「キョン！　いつまで寝てるのよ！　前にも言ったけど、団長を差し置いて寝るなんて許されないわ！　早く来なさい！」

俺の頭を重くしているのはこのハルヒの怒鳴り声ではない。
今プールの中にいるのは俺と妹以外の七人。そして俺は、妹に引っ張られながらプールにまっしぐらだ。この方程式が導き出す答えはあまりにも簡単だった。

長門は言った。「全員がプールに入ることがトリガーになる」と。
つまり、とうとうその時が来てしまったわけだ。

寝起きの状態で入るのは避けたいところだが、生憎ハルヒは準備体操する時間さえくれないようだ。

「これで全員揃ったわね！　さあて、何が起きるかしら？」

「全員揃ったら何か起きるの？」

聞くな、国木田。知らぬが仏だ。谷口は何か違う想像でもしているのか、鼻の下を伸ばしっぱなしだ。ハルヒのやつ、本当にこいつらまで連れて行く気なのか？

「いよいよですねえ。僕は時間移動の経験がないのでよく知りませんが、そんなに辛いのですか？」

思い出したくもないし、スターツアーズ「時間移動とは限らない。『今日からマのつく自由業』の原作では何ともないように見えるが、あれは予行演習の賜物だ。結局のところ影響の程は未知数である。古泉の苦痛に歪む顔が見られるかもしれん。

などと嫌味を言う間もなく、それは突然やって来た。

突如渦を巻くプール。そして、それに巻き込まれる俺たち。今気付いたことだが、俺たち九人以外の客はいつの間にかプールから上がっている。それどころか、この異常事態に客はおるか監視員すら気付いていない。

谷口と国木田、そして妹はさすがにパニック状態だ。更に言うと、何故か事情を知らない鶴屋さんより知っているはずの朝比奈さんの方がパニック状態だ。やはり時間移動とは勝手が違って冷静ではないられないようだ。ちなみに長門は言わずもがな、古泉は少し引きつっているが、やはり笑顔を崩さない。くそ忌々しい。そしてハルヒはと言うと、目をキラキラ輝かせてこの渦をもろともせず子どものようにはいでいる。

その刹那、ハルヒの目が輝きを増したかと思うと同時に渦の勢いも増した。無駄な抵抗はやめよう。体力温存作戦だ。

俺が諦めの姿勢を固めた直後、ついに頭まで水に浸かりお待ちかねのスターツアーズへと突入した。某ランドのスターツアーズに乗ったことはないのだが、この何とも形容しがたい感覚はスターツアーズと呼ばずして何と呼ぶべきかという代物だった。

もはや逃げられはしないのだから、せめてまともな場所に呼ばれることを祈ろう。

今までのことが夢なら喜ぶべきなのか、フロイト先生に笑われるのを嘆くべきなのか悩むところだが、どうやら悩む必要はなさそうだ。

目が覚めて最初に見えたのは天井ではなく、俺の心と反比例して雲ひとつない空だった。そして辺りを見回せば、とても現代日本とは思えない風景。アスファルトや建造物に邪魔されることなく生き生きとしている植物、広い牧草地で伸び伸びとしている家畜達、石造りの何ともメルヘンチックな民家、そして空気は思わず深呼吸し

たくなるほど澄んでいる。そこは「マ王」こと「渋谷有利」が最初に飛ばされた場所に酷似していた。

そして、俺の隣で寝ていたハルヒは突然起き上がり、

「ここって異世界よね!？」

大きな声を出すな。原作の展開を忘れたわけではあるまい。

「既に手遅れですよ」

古泉の声に視線を戻すと、いつの間にか四面……いや八面楚歌状態だ。ここは人間の国なのか……？

人間と魔族の見分け方は分からないが、せめて彼らが何を言っているのかだけでも聞き取ろうと耳をそばだてていると、

「何だ、こいつらは! どこから現れた!？」

どうやら言葉だけでは正体は特定出来ないようだ。彼らが人間だろうが魔族だろうが、いわゆるハルヒ補正で全ての言葉を理解出来てしまうだろうからな。

そんな彼らの問いかけに返答出来ずにいた俺を尻目に、長門がとんでもないことを口走った。

「私たちは魔族」

長門さん? 貴女は何をおっしゃっているのですか? 自ら魔族だと名乗るなんて自殺行為ですよ?

まあ、黒髪黒目が混じっている時点でバレバレ……あれ?

「大丈夫、ここは魔族の土地。念の為、髪と目の色は変えておいた」
長門の一言で住民たちの表情が和らいだところを見ると、ここは魔族の国である真魔国に間違いなさそうだ。

そして、確かに髪と目の色が変わっている。変える必要のない人まで変わっている気がするが、ハルヒではなく長門がしたことだ。
文句は言っまい。

ここで、全員の髪と目の色を紹介しよう。

ハルヒは真紅の髪と瞳。そのでかい目をまるで炎が燃え盛るかのよう輝かせ、アメフトマッチョは出て来ないのかしらなどと言っ

ているが、俺としてはあいつにはお目にかかりたくない。と言うか、アーダルベルトな。

長門は白銀の髪と灰色の瞳。どうも、あまり意思が感じられない色なのだが、魔族である証拠を見せる為とか何とか言って魔術を使おうとしている。長門の言う魔術とやらがいつものとんでも能力ならば、正直こんな所でぶっ放すのはある意味やばいと思うのだが。

古泉は金色の髪と青い瞳。「欧米かつ！」とつつこみたくなるその姿が妙に似合っているのが腹立たしい。僕がやってみましようかなどと言った古泉が調子に乗って、「炎に属する全ての粒子よ、創主を」まで言いかけたところで口を塞いだ。ギリギリセーフだろ？朝比奈さんはピンクの髪と緑色の瞳。朝比奈さんらしく可愛らしい色だが、本人は泣きそうである。表情から察するに、きっと未来と連絡が取れないのだろう。

鶴屋さんはオレンジ色の髪と紫の瞳。朝比奈さんを見て、嬉々としながら抱きついている。この状況に全く動じていないあたりはさすがだ。とばけた振りして実は全てを知っているのではなからうか。谷口は紫色の髪と茶色の瞳。「俺は目の保養の為に来たんだ！」とわめいている。このメンバーだからいいようなものを、他の女子ならドン引きだぞ。

国木田は緑色の髪と茶色の瞳。どうやら、周りにいる魔族をハルヒが用意したエキストラか何かと勘違いしているらしい。こいつも頭が良さそうに見えてけっこんな天然だ。谷口とばかりつるんでいるからそうなるんだ。

妹は水色の髪と緑色の瞳。しゃみも連れてくれば良かったね、などと言っているが猫はプールには連れて来られないし、この世界で「じゃあ」と鳴いた日にはゾなんとか竜と間違えられてとんでもないことになる。

そして俺はというと、青い髪と……目の色は自分では見えないので分らない。

こつも全員違う色だとカラフルすぎて目が疲れる。映像でお見せ

できないのが残念だ。

そう言えば、古泉が堂々と超能力を使っているのにハルヒがあまり驚いていないのは何故だ。夢だとも思っているのか。

「超能力？ 何言ってるの。眞魔国なんだから魔術に決まってるじゃない。ほら、あたしも使えるし」

そう言っただけでハルヒは右手から炎、左手から水を出した。

普通なら一人一つだと思っただけだが、その辺はさすがハルヒと言っべきか。魔王より強いんじゃないか？

それはそうと、真正正銘の万能選手の能力はどうなっているんだ。「この世界に情報統合思念体は存在しない。私の能力も制限されている。涼宮ハルヒが私に与えた能力は『召喚』」

「召喚だ？ 魔物でも呼び出すのか？」

「限定的なものではない。あらゆるものを召喚出来る」

そう言っただけで長門は右手にナイフ、左手にフォークを召喚した。能力が制限されているとは言え、相変わらず万能だ。と言うか腹でも減ってるのか？

ちなみに、他の連中はいまいち分かっていないようだ。自分の能力はもちろん、この状況について来られていない。

むしろいきなりついて来られる奴がいたら、是非ともハルヒのお守り役を交代してほしいものだ。

と思っただけ……、

「へえ、すごいねこれ。指先がビリビリするっさ！」

……そう言っただけで、いきなりついて来られるお方が。

どうやら鶴屋さんは電撃を使えるらしい。さっきからビリビリと遊んでいるが、人に向けないでくださいよ。

その様子を見た朝比奈さんはいつものように不安になりながら、「キョン君。私こう言うのってよく分からないんだけど……」

安心してください。俺も分かりません。いや、分かりたくもありません。

それに、朝比奈さんと妹はあんな物騒なもの使わなくていい。

谷口と国木田は、その様子を見ながらポカーンとしている。おい、谷口。アホみたいな顔が更にアホみたいになっているぞ。

その後、俺たちに今日の宿がないことを聞いた親切な老人がテントを提供してくれた。この際、テントだろうと寝袋だろうと文句は言うまい。

それにしてもこの老人の見事なまでの白髪アフロ、何か見覚えが……。

テントに入つてすぐ、谷口が不満を漏らす。

「何でこの俺が、むさ苦しい男共と一つ屋根の下で寝なきゃならんむさ苦しくて悪かったな。そんなに嫌ならお前だけ野宿でもかまわんぞ。」

と、谷口を追い出そうかと思つた矢先、さっきの老人の声が聞こえてきた。

「これはこれは、お早いお着きで」

「城からそんなに遠くないからね。白鳩便読んで、飛んできたよ」

「まったく。お前は落ち着きがなさすぎる。仮にも一国の王ならもつと冷静にだな……」

なるほど。さっきの老人、見覚えがあると思つたらそういうことか。

だが、白鳩便一つで飛んでくるなんて何かあつたんだろうか。もしかして俺たちか……？

その考えを裏付けるように、その声はだんだん近付いてきた。

第3話 魔王に対抗しようなんて思ってるんじゃないだろうな

先手必勝、と言う言葉の意味をご存じだろうか。勝負事で、先手を取れば必ず勝てると言うような意味合いである。

隣のテントから、その言葉を叫びながら飛び出した似非魔族が約一名いるのだが、何に勝ちたいのかよく分からないし、そもそもいつ勝負が始まったのか甚だ疑問である。

ハルヒの理不尽な宣戦布告にたまらず飛び出すと既に「魔王ご一行」と対峙していたが、まだ古泉よろしく手のひらに火の玉を出したところだった。

だが、俺が止めに入ろうとした時にはハルヒはそれを放つ構えを見せており、それに先んじて魔王の側近たちは剣を構え主を取り囲んでいる。さすが、優秀だな。

距離的に今から止めに行っても間に合わないし、口で言ってやめると思えない。

考える。考えるんだ。

考えた末、結局ハルヒの攻撃を止めることは出来なかった。

だが、被害はなし。止める術が浮かばず咄嗟に魔術を使ってみたが、見事にハルヒの一撃を消し去ったのだ。

どうやら俺は水の力を与えられたらしい。予想外の出来事にその場にいた全員が唖然としていたが、すぐに怒号が飛んできた。

「何すんのよ、アホキョン！ せっかくの先制攻撃が台無しじゃない！」

「アホはお前だ。相手も確認しないで、いきなり仕掛ける奴があるか」

とは言ってみたものの、相手が誰か分かった上で仕掛けたんだろうな。時々、変に対抗心を燃やすからな。

「アホなあんたと違って、その似非アフロがテントを貸してくれ

た時点でこの展開は読んでいたわ。相手を確認するまでもないですよ」

その言い分は分かる。俺だって途中から気付いていたからな。だが、それはそれで尚更問題ありだ。

魔王だと分かっているのに攻撃を仕掛けてただなんて、下手すれば反逆罪で打ち首に……なんてことを言ってもしょうがないな。この魔王がそんなことをするはずがないのは俺もよく分かっている。

とりあえず今日は強面の側近はいないようだし、謝っておけば何とかなりそうだ。

「申し訳ありません、陛下。こいつ血の気が多くて、変わり者……いえ、強者を見ると勝負せずにはいられない性質なんです。決して暗殺などと大それたことをしようとしたわけではありません。どうか寛大な措置を」

ない頭を捻って出来るだけ失礼にならないような言葉を選んだつもりだが、やはり古泉に任せるべきだったか。

当の古泉は、遅れて出てきたくせに俺の中途半端な謝辞を聞いて笑いをこらえていやがる。とりあえず本気で笑っている谷口は後で殴っておこう。鶴屋さんはそれより大声で笑っているが、正直笑っていられる状況ではないですよ。他のマ王相手だったら、本当に処刑されていた可能性もあるんですから。

「ごめんごめん。普段のキヨン君とギャップがありすぎて思わず笑ってしまっただけさ。でも格好良かったによる！」

お世辞でもそう言っていたけると助かります。

うん、やっぱり心の底からバカにしていそうな谷口は殴っておこう。

そして、当の魔王一行は俺の貧相なボキャブラリーを連ねた謝辞に啞然としていたが、一時の沈黙の後、先ほどの血の気の多い側近が口を開いた。

「このへなちよこを魔王と知っての狼藉か！？ 血の気が多いからとそんな言い訳が」

「待て、ヴォルフラム」

先ほどから興奮しっぱなしのこの金髪とエメラルドグリーンの瞳を持つ美少年の名は「フォンビーレフェルト卿ヴォルフラム」。炎術を操る、魔王の側近である。

「ウェラー卿！ 何故止める！」

フォンビーレフェルト卿を制したのは、ダークブラウンの髪と薄茶の瞳を持つ好青年「ウェラー卿コンラート」。フォンビーレフェルト卿の異父兄だが、魔力は皆無で剣術に秀でている。

「閣下。ここは陛下に任せましょう」

この実に側近っぽくないアフロじいさんは「グリエ・ヨザック」。青い瞳と偽アフロの下に隠されたオレンジの髪を持つ。ウェラー卿同様魔力はないが、お庭番と呼ばれあらゆる任務をこなす。

ウェラー卿たちの説得でフォンビーレフェルト卿が一步下がると、彼らの主である魔王がおずおずと前に出てきた。本当にへなちょこだな。

「えーと……と、とりあえず事情を詳しく説明してもらおうかな」

彼こそ眞魔国第二十七代魔王「渋谷有利」その人である。見た目は俺たちと変わらない普通の日本人だ。それもそのはず、日本で平和に暮らしていたところを突然魔王にされたのだから。

魔王陛下は寛大にも弁明の余地を与えてくれたが、誰が説明するんだ。俺はもう嫌だぞ、と古泉の方を見る。いつもなら頼んでもいないのに説明し始めるくせに、仕方ないですねと言いたげな顔で肩をすくめた。

「まず自己紹介を。僕は古泉一樹と申します」

古泉が名乗ったのを皮切りに、各々が普通に名乗る。俺はいつも通りハルヒに邪魔され、ここでも「キヨン」呼ばわり決定だ。

そして当のハルヒはと言うと……、

「あたしは涼宮ハルヒ！ 宇宙人、未来人、異世界じ、んぐつ！？」
とりあえず口を塞いでおいた。それで大人しく黙ってくれたので良ししよう。

問題は魔王の方だ。怪訝な顔で俺たちを見回している。魔族だと思っていた俺たちが、まるで日本人のような名前を口にしたのだから無理もない。

「えーと……皆さんは、眞魔国日本村の方々ですか？」

そらきた。困惑しているのか、存在しない村の名前まで出ちまった。どうする気だ、古泉。

「正体を明かそうと思います。その方が早くこの場を納められそうですし、ただの庶民設定では涼宮さんが満足するような展開には発展しないでしょうから」

確かにその通りかもしれんが、ある意味危険な賭けだ。勝算はあるのか？

「おそらく彼なら、同じ日本人を邪険にしないと思いますよ。もっとも僕たちは、同じ日本人ではなく異世界の日本人なわけですが」俺たちの地球ではなく、眞魔国の異世界たる地球の住人に成りますすつもりか。まあ、日本も広いしはれることはないと思うが。

そして、俺たちは魔王の根城である血盟城に向かうことになった。反逆罪で捕まったわけでもなければ、ハルヒの号令で攻め落とすにきたわけでもない。古泉の、隠すべき所はしっかり隠した分かなりやすい説明を聞いた魔王が、俺たちを招待してくれたのだ。

フォンビーレフェルト卿は反対していたし、俺も反対に一票投じたいところだったが、俺が反対派についたところで、二対十一で劣性なのは変わらない。

そもそも双方のトップたるハルヒと魔王が賛成している時点で、多数決は成立しない。反対意見を言ってもどうせ無駄である。

結果、明らかに反対しているのはフォンビーレフェルト卿ただ一人。それも結局、魔王に説得されて大人しくなった。

説得の最中にフォンビーレフェルト卿が朝比奈さんを指差していたのは気のせいではないだろう。大方、魔王が朝比奈さんに手を出さないか心配しているんだろうが、この魔王にそんな甲斐性はないし、あっても俺がさせん。

そんなこんなで血盟城に到着した俺たちを真っ先に出迎えたのは、
「おかえりなさいませ、陛下！ ご無事ですか！？」

どう見てもご無事な魔王に向かって、興奮した様子で大声を上げている彼は「フォンクライスト卿ギンター」。スミレ色の髪と瞳を持つ見目麗しい王佐である。魔王への愛が強すぎて暴走することもしばしば。

「落ち着いてよ、ギンター。お客さんがびっくりするじゃん」

確かに知らない人なら驚くだろうが、実際驚いているのは谷口と国木田、小説を読んでフォンクライスト卿と言う人物を知っているはずの朝比奈さんだけである。

鶴屋さんと妹は笑っているが、それをどう思ったのかフォンクライスト卿はこちらを一瞥してからこう言った。

「陛下。もしや、そちらがヨザツクの手紙に書いてあった方たちですか？」

「うん、その通り」

やはりそう言うことだったのか。ハルヒが水と火を両方出しているのを偶然目撃して白鳩便を飛ばしたんだろう。

「まず間違いないだろう。この二人の魔術を見たが、並のものでもなかった」

魔王の言葉にウェラー卿が補足説明を加えた。俺とハルヒのことを言っているようだ。ハルヒはともかく、俺の魔術も並ではないのか。ハルヒが超特盛で俺が大盛くらいだろうか。

そんな俺とハルヒの顔を順番に見たフォンクライスト卿は少し表情を曇らせ、

「一体、何者なのですか？」

当然の疑問だ。だが、正直に答えていいのだろうか。フォンクライスト卿のことだ。いらぬ心配をするに決まっている。

さすがのハルヒも黙っており、俺もうつむいて口を閉じている。だが、沈黙が辛くなり顔を上げると、ウェラー卿が魔王にアイコンタクトを試みているのが見えた。

その意味を理解したらしい魔王がうなずくと、ウェラー卿はこちらを一瞥してから事情を話し始めた。

ウェラー卿は俺たちのことを包み隠さず話した。

別にかまわんのだが、魔王の許可より俺たちの許可を取るべきじゃないのか。と言つても、魔王達にはほとんど話してあるので、今更隠す必要もないのだが。

「地球の日本から……？　　と言うことは陛下のご友人の方々なのですね！？」

ウェラー卿の説明が終わるとフォンクライスト卿がそんなことを聞いてきた。

確かにそう取られてもしょうがない説明の仕方だったが、目を輝かせて興奮する理由はよく分からない。

返答に困っていた魔王だったが、フォンクライスト卿の期待に満ちた表情を前にしては、答えざるを得ない。

「ま、まあ、そんなとこ」

「やはりそうなのですね！？　これだけの人数の魔族が、異国の地で陛下の元に……さすがです！　陛下！」

さすがはフォンクライスト卿。ちよつと大げさな気もするが、そう思わせておいた方が都合は良さそうだ。

その後、上機嫌になったフォンクライスト卿は、歓迎パーティーの準備をと言つて軽やかなステップでいなくなり静かになったところで、魔王が今更感のあるつつこみをしてきた。

「そう言えばあんたたち、日本人なのに何でそんな髪と目の色なんだ？　もしかして不良？　それともコンラッドみたいにハーフとか？」

「えーと、陛下……これには、よんどころない事情があるのだが……。あまりつつこまないでくれるか。やましい事があるわけじゃないんだ」

「ふーん。ま、いいけどさ。でも、その『陛下』ってのはやめよう

ぜ。ギコンターに友達だつて言った以上、そんな他人行儀な呼び方おかしいだろ？ だから名前で呼んでくれ。なあ、コンラッド」

「ええ。私のことも『コンラッド』と呼んでください。その方が呼びやすいでしょう」

それは嬉しい申し出だ。正直「〴〵卿」と呼ぶのもいい加減面倒になつてきたからな。

「じゃあ、そうさせてもらうよ。渋谷、コンラッド」

「ああ。よろしくな、キヨン」

それは本名じゃないけどな。

パーティーの準備が出来るまで時間を潰していてくれと言われた俺たちは、この広い血盟城で迷子になるまいと庭で待つことにしたのだが、城の中を探検したそうにしているお方が約一名。

原作によれば、この城には渋谷も知らない場所がけっこうあるみたいだし、下手に歩き回らない方がいいだろう。迷子になったら迷惑をかけるとハルヒを説得したが、その代わりに、とばかりとんでもないことを言い出した。

「パーティーの席で渋谷の足下にナイフでも落としてやろうかしら意味分かつて言っているんだよな。ならば断固阻止せねば。」

「昼間のこともそうだが、まさかお前、魔王に対抗しようなんて思ってるんじゃないだろうな」

「もちろん思ってるわよ。どこの世界でも、親玉を倒せば勝ちなんだから」

親玉つて……まるで悪役扱いだな。魔王と言う名だけ聞けばまさに悪役だが。

と言うか、勝つてどうするつもりだ。この国を乗っ取るつもりか。そんなことしないわよ。勝負事では勝たないと気が済まないのよ。だからそもそも、その勝負すら始まってねえつつの。

と、これ以上つつこみを入れても無駄なことは百どころか千も承知だ。こうなったらその場で止めるしかない。

「……その必要はない」

長門……？　どういう事だ？

「そうですね。僕もそう思います」

……前から思っていたことがある。

この二人はよく同調するが、裏で示し合っているんじゃないかな。いつも自分たちだけで納得して、俺と朝比奈さんが置き去りになるのが少々気に食わない。

まあそのことは後で問い詰めるとして、どう言うことか説明してもらおうじゃないか。

「簡単なことですよ。初めての会食の際、フォンビーレフェルト卿が落としたナイフを拾った渋谷君がどうなったかご存知でしょう？　結果的には魔王たる証を示すことになったとは言え、後悔しているのは明らかでしょう」

つまり、仮にハルヒがナイフを落としたとしても既に学習済みの渋谷は拾わないと、そう言いたいらしい。

一理あるが、相手は一応そんなしきたりとは無縁である日本人と言うことになっているハルヒだ。油断して拾わないとも限らない。その可能性が0じゃない限り、ハルヒを止めるのが一番確実だと思うが。

と、俺がハルヒを止める意思を示すと、少し考える素振りを見せた古泉が言う。

「あなたがどうしても言うなら止めませんが、それで神人が出現した時はあなたにも出勤してもらわねばなりませんね。お分かりかと思いますが、ここには機関の人間は僕をおいて他にいませんので」
困ったようなポーズをとっているが、顔はにやけている。そんなに俺と神人を戦わせたいのか。

確かに今の俺の力ならあの巨人と対峙することも可能かもしれないが、そもそもこの世界に神人は現れるのか？　出来れば、と言わず絶対遠慮したいところだが。

「今のところ何とも言えませんが、この世界においても涼宮さんの

力は健在です。ですからその可能性は十分にあると思います。その場合、閉鎖空間内に止まってくれる保障はありません」

「何故だ？」

「我々の世界と違い、ここは何が起こっても不思議ではない魔族の土地です。涼宮さんが破壊しても大丈夫だと思っ場所ならば、現実

に神人が出現しても何ら不思議はありません」

それだけは避けなければなるまい。

そんなことになれば、本当に眞魔国は……いや人間の国も含め、

この世界はハルヒ大魔王に乗っ取られてしまう。

世界征服の片棒を担ぐのはご免だ。

古泉の新手の脅しに、ハルヒを止めていいものかと悩んでいると、いつの間にかトイレに行っていたらしい鶴屋さんと妹が戻ってきた。ハルヒはもちろんのこと、この二人も妙に楽しそうだ。

ハルヒと鶴屋さんはどこか似ているところがあるが、最近妹も似てきた気がする。頼むからハルヒみたいにならないでくれよ。

そんな俺の願いを余所に、この状況に順応している妹と鶴屋さん。もはや、常人の感性からは逸脱しつつあるようだ。

「いやあ、ハルにゃんのサプライズはすごいねえ。やっぱりみくるたちにも魔術が使えるのかな？」

今のところ、魔術を使ったのは五人。

残りの四人にも魔術が使えるのかどうかは定かではないが、ハルヒのことだから少なくとも朝比奈さんと妹には何らかの能力を与えられているはずだ。

谷口と国木田は……まあいいか。

個人的には朝比奈さんと妹は回復系魔術ではないかと予測している。と言うか二人が攻撃魔術を使う姿が想像できない。

二人が魔術を使う姿を想像していると、当の二人が歩み寄ってきた。

「キョン君、私も魔法使いたーい。どうやるのー？」

「あの……私も、その……使ってみたいです！」

朝比奈さんまで……。

残念ながら俺に聞かれても分からない。あの時はハルヒを止めようと必死になっていたら、たまたま魔術が発動したからな。

普段から使い慣れている古泉なら分かるんじゃないか？

「以前にもお話したと思いますが。僕の力は修行して身につけたものではありません。突然力を手に入れ、その使い道も使い方も知っていたのです。知識や経験に基づいた力ではないので、言葉では説明出来ません。やはりこういった感覚的な事はご自分で見出すしかないでしょう。ただ、一つヒントを与えるならば……イメージでしょうか」

そう言えば俺もあの時、火を消すことだけを考えて水をイメージしたような記憶がある。それがたまたま俺の能力と合致していたから発動したが、本来ならハルヒや長門のような例外を除けば、自分の能力を手探りで開花させるしかない。

どんな能力があるのかも全て把握しているわけではないし、けっこう面倒だ。長門なら全員の能力を把握していそうだが……。

「私には分からない。涼宮ハルヒによってブロックされている」
また余計なことを……。使ってからのお楽しみとでも言いたいか。

古泉からのヒントを得た二人は、さっそく目を閉じて何かをイメージしているようだ。

いきなり攻撃魔術が発動しなけりゃいいが。

そして、しばらく目を閉じていた二人が同時に目を開けた、その直後……！

「あれは……！？」

なんと、タコが現れた！ まさか合体魔術で召喚！？

「へ、陛下のご友人の方々！ パーティーの準備にもうしばらく掛かりますので、先に汗を流されてはいかがでしょうか！？」

タコ……ではなく、ただのスキンヘッドの兵士だ。

風呂に入れと言ったことか。嫌な予感しかしないのだが……。

第4話 この国の一般的な下着だそうです

タコ、もといスキンヘッドの兵士（ダカスコスと言ったか）に風呂まで案内された俺は、原作の展開を思い出していた。

確か渋谷が入っている時に、金髪のセクシークイーンが入ってきて……、

「どうかしましたか？」

「いや、何でもない」

「我々が入るのは魔王陛下のプライベートバスではないので、特に心配は要らないと思いますよ」

お見通しか、この野郎。

今後のこいつとの付き合い方を考えるようになるほどの洞察力だ。まさか、俺の心の内が筒抜けなんてことはないだろうな。

そんな俺の心配を余所に、女性陣ははしゃぎながら女湯に入ってしまった。

その姿を見ながら溜息を吐いた俺に、追い討ちを掛けるように谷口が呟く。

「混浴じゃないのか。なら覗」

「命が惜しいならやめておけ」

そんなことをすれば、魔力を手に入れたハルヒの餌食になるのは必至だ。その前に俺が黙ってはいないがな。

谷口をけん制しつつ風呂に入ると、そこにはイメージ通りの光景が広がっていた。渋谷専用と同等、とまではいかないと思うが、今までお目にかかったことのない広さだ。石造りの壁に張り付いた牛だか何だかよく分からない彫刻の口から湯が流れている。こんな風呂が貸し切り状態なんて、緊張するなと言うほうが無理だ。

そう考えると、渋谷の順応性もたいしたものだ。俺を始め、ここにいるメンバーには到底こなせない職務である。ハルヒなら喜んで引き受けていただろうが、そうなった場合はこの世界の未来が心配

だ。

そんな心配をしながら、シャンプーらしきボトルに手を伸ばす。嗅いだこともないにおいだが、渋谷が使ったあれではなかるうな。確か「美香蘭」……だったか？ あんなものを使ったら後が怖いが、まさかこんなところにはないだろう。

そんな風に思いながら使うのを迷っている俺の思考を読む古泉。もはや、超能力で心が読めるのではないかと疑いたくなる。

「仮にこれが例のシャンプーだったとしたら、涼宮さんたちの真意を知る良い機会ではありませんか？」

「全裸で近寄るな。そんな危険な賭けをする気は毛頭ない。そんなに興味があるなら、お前が使えばいい」

「おや。あなたは僕に使ってほしいのですか。僕としては、あなたが僕のことをどう思っているのかを知りたい機会ではありますが……僭越ながら言わせていただきますと、もしあなたが僕に少しでも好意を持っているなら、下手をすると谷口君と国木田君にいらぬ誤解を与えて」

「ちょっと待て。言いたいことは分かる。だが、それなら俺が使っても同じことだろう。いや、むしろ俺が使った方が危険な状態になる可能性もある。あれでも一応友達だからな。つまり、俺もお前も使ってはいけないと言うことだ」

「残念ですねえ。『悪意を抱くものはより険悪に。好意を持つものはより大胆に』でしたか。さて、皆さんはどちらなのでしょうね。少なくとも涼宮さんは、」

「それ以上は言うな。どちらにしても、面倒なことになるのは間違いない」

そう言い捨てボトルを戻した俺だったが、既に谷口は止める間もなくそのシャンプーを使っていた。その姿を迂闊にも目に入れてしまったが、どうやら何ともないようだ。

谷口を実験台にしてしまったような気もするが、言わなければ分からないだろうから気にすることもない。そう結論付けて、晴れて

無罪放免となったシャンプーを使っていると、もしかして谷口が喚き出した。どうやらまだ、隣を覗くことを諦めていないらしい。

その声を聞いた俺は、目にしみ始めたシャンプーを即行で洗い流し、谷口に石鹸を投げつけた。これで女風呂の危機と谷口死亡フラグは回避出来ただろう。

その後、ゆつくりと風呂につかってようやく落ち着いた俺だったが、それは束の間の安寧だった。

脱衣所に戻った俺は、とんでもないものを目にしたのだ。のぼせて幻覚でも見ているんじゃないだろうか。そうであつたらどんなにいいことか。

何故この格好なのかと気にも留めなかった北校の制服はいつの間にか洗濯され、これまたいつの間にか綺麗に畳んで置いてあつた。

そこまでなら気が利くなと感心するだけで済んだのだが……これは何だ。

「何をそんなに怪訝そうな顔をしているのですか？　これが一般的な下着と言うことらしいのですから、何もおかしいことはないと思います」

「ああ、そう言えばそんな設定も……じゃなくて！　そうじゃなくてだな！」

「いやあ、いい湯だったぜ……ん？　何騒いでるんだ、キョン……」風呂から上がって意気揚々と脱衣所に戻ってきた谷口は、例のものを握っている俺たちを見ていつかのようなアホ面をさらしている。頬を赤く染めているのは湯上りのせいだと信じていた。

「すまん」

これまたいつかのように真面目な声を出した谷口は、後から来た国木田を押しつけて浴室に戻っていった。

そっちに逃げても行き止まりだが、追う気にもならん。

「危ないなあ。何かあつたの？」

「アホは放っておけ」

「ふーん、まあいいけど。それより、古泉君。それは？」

「この国の一般的な下着だそうです。ここではこれを書くのがマナーだそうで」

「へえ、変わったマナーだね」

国木田よ。お前は何故これを見て冷静でいられる。

ただの天然なのか、それとも既にこの状況に順応しつつあるのか……。いずれにしても、こんなものを穿く奴の気が、

「つて、おい！ 古泉！ いつの間に穿いたんだ！？ お前、恥ずかしくないのか！？」

「郷に入っては郷に従え、ですよ。それとも、あなたはノーパンで過ごすおつもりですか？」

くっ……これが谷口のセリフならばいくらでも反論のしようがありそうだが、妙に似合っている古泉が言うと言得力がある。

しかも、恥ずかしげもなくいつものように涼しい顔をしているところを見ると、むしろ気に入ったんじゃないだろうなとも疑いたくなる。

だが、こいつの笑顔がちょっとやそつとじゃ崩れないことは良く分かっている。今回は事前情報があったのだから尚更だ。

その情報は俺の頭の片隅にも転がっていたはずなのだが、どうやら無意識に情報封鎖が行われたらしい。俺の脳では処理しきれない、と言つか、理解出来ない情報なのだろう。

だが、理解出来ないからと言って一方的に切り捨てられるかと言え、そうではない。

古泉の言うように「郷に入っては郷に従え」、つまり、その習慣に従えと言うことだ。その習慣を蔑ろにすることは、これすなわち、自らに変人と言うレッテルを貼ることなり。

ハルヒ率いるこの変人集団の唯一の普通人であると自負している俺が、その看板を下ろしてまで我を貫き通すだろうか。

と、腹を括った俺だったが、古泉のように堂々としていられるわけがない。

だが、堂々としている古泉もまた変人なのだと勝手に納得した俺は、ハルヒたちには絶対に見られまいと心に誓い、手に握っていた妙にツヤツヤとした黒の紐パンに足を通した。

妙な気分だ。鏡は見ないようにしよう。

ようやく脱衣所を後にすると、ダカスコスが無駄にいい姿勢で待っていた。背筋が反りすぎていて逆に見栄えが悪いのだが、そこは目を瞑ってやるべきだろう。

本当は魔族でも何でもない俺たち相手にここまで畏まれるのも、こちらとしては逆に気が引けるといふものだ。

これ以上プレッシャーを与えまいと目を逸らすと、何故か谷口がダカスコスに向かって敬礼していた。こいつも既にこの世界に毒されているらしい。

「お勤めご苦労様です！ ピカスコスさん！」

「ダカスコスです」

谷口よ。そのネタは渋谷の使い古しだ。

その後、ダカスコスの案内で歓迎パーティとやらの会場に到着した俺たちは、テンションが天と地ほどにも違う二人に迎えられた。

右におわすは、さっきより更に上機嫌になったギンター。そして左におわすのは……、

「うげっ！ 何だよ、あのゴッドファーザーは！？ こっち睨んでるぞー！」

と、谷口が喚き散らすのも無理はない。予備知識がある俺ですら怯んでしまったその凍りつくような眼力の持ち主は、「フォンヴォルテール卿グウェンダル」。コンラッドとヴォルフラムの兄であるが、見た目はどこを取っても全員似ていない。この長男はいつも不機嫌そうな顔をしているものだから、彼と言う人物を知らなければ

とりあえずビビることしか出来ない。

勝手に震え上がっている谷口は放っておくとして、渋谷やコンラッドはまだ来ていないのか。女性陣がまだなのは想定内として、渋谷たちも汗を流しているのだろうか。

「陛下は今、グレタと……いえ、姫様とお戯れ中です。呼んで参りますので、こちらにお掛けになっってお待ちください」

「分かりま」

「お戯れ中だと!？」

「……ど、どうなさいました？」

「いや、何でもないんだ。気にしないでくれ。ははは……」

慌てて谷口の口を塞いで取り繕ったが、グウェンダルの視線が痛い。

アホ谷口め。やっぱり連れてくるべきじゃなかったな。この分だと、あの人が登場したら……、

「あらあ、もうこちらにおいででしたのねえ。陛下のお友達がいらっしやっていると言うので探していましたのよ」

ぶっ！ 心配したそばからご登場だ。

声がした方を向くとそこには、渋谷が浴場での邂逅を果たし欲情しそうになった……いや、大変にどぎまぎした金髪のセクシークインが立っていた。

彼女は「フォンシュピッツヴェーグ卿ツェツィーリエ」。嘸まずに言えたのを褒めてほしいほど言いづらい名前で、周りからは「ツエリ様」と呼ばれているが、ギンターは彼女と入れ替わりで出て行ってしまったし、今はそう呼ぶ人物はここにはいない。

「母上!」

「母上!？」

谷口が、渋谷と同じような反応を見せている。今回は国木田も驚きを隠せないようだ、それが普通の反応だ。

俺たち以外でここにいたのはグウェンダルただ一人。つまり、ツエリ様に向かって母上などと言ったのは彼を置いて他にいない。

初めから知っていた俺ですら、こうして間近で見るととても信じられない。このお方は、グウエンダルたち三兄弟の母上にして更には前魔王と言う、とんでもステータスまで兼ね備えたスーパーウーマンなのだ。

そしてその彼女は、スリットから悩ましい美脚を覗かせながらこちらに寄って来る。谷口は言わずもがな、鼻の下があり得ない長さになっているし、あの古泉ですら笑顔が引きつっているのが見て取れる。

長男であるグウエンダルもやれやれといった様子で、特に止める気はないらしい。無駄だと分かっているのだろうか。

このままでは谷口が暴走しかねないと危惧し始めたちょうどその時、背後からの闖入者にツエリ様は歩みを止めた。

「お待たせ！」

そう言つて、湯上りの色つぼさなど微塵も感じさせないでズカズカと入り込んできたのは言わずもがな、ハルヒである。

人の家（城）なんだから静かにしなさいと言ってやりたかったが、ハルヒのおかげで谷口（と言うかツエリ様）の暴走を食い止められたのだから今回は大目に見よう。

そんなハルヒはさておき、本当に見るべきはその後からおずおずと入室して来た朝比奈さんだ。浴衣とかでなく制服なのは残念だが、ハルヒに急かされてきちんと乾かせなかったのであるうその御髪と上気したご尊顔は、何と言うかもう……谷口、お前は見るな。

我が妹は問題外として、長門は普段と変わらぬ様子で本を読みながら入って来たし、鶴屋さんはハルヒと同じような調子だ。と言うか、朝比奈さんより髪が長いのにばっちり乾いているのは何故だろうか。

と、こんな風に女性陣を観察していたことに我が団長様はご立腹のようだ。

「ちよつと、キョン！ あんた」

「まあ、かわいい！ 貴女たちも陛下のお友達？ それともこの中

に恋人でもいるのかしら？」

なんと！ あのハルヒの怒号を打ち消してしまわれる貴女は女神様ですか！？ ……なんてことは思わない。

ハルヒを圧倒するパワフルさは尊敬に値するが、質問の内容は好奇心の固まりだ。これではただのオバ……いや、これを言ったら鞭で叩かれそうだな。谷口には教えないでおこう。

それはそうと、一向に誰も答えないのは何故だ。朝比奈さんがどもっているのも妹が全く理解していなそうなのも想定内だが、鶴屋さんはただニヤニヤしながらハルヒを見ているだけだし、当のハルヒはわなわなとふるえている。何か癪に障ったのだろうか？

「な、何であた、あたしがいつとこ、恋人同士なのよ！ 冗談じゃないわ！」

「いつてえな、おい！ 何で俺を蹴る！？」

ハルヒは何を勘違いしたのか、顔を真っ赤にしながら俺のスネを蹴飛ばした。

確かにそんな風に勘違いされれば顔を真っ赤にするほど怒るのは分らないでもないが、勘違いしているのはお前の方だ。

そんな反応を示したら、逆に勘違いされて……、

「あら、ごめんなさいねえ。でもそういうことなら、あたくしにもまだチャンスはあるのね」

などと言いながらチラチラと俺とハルヒを交互に見るツェリ様。

やはり、何か勘違いされたようだ。

ちなみに、チャンスなどと言っているのはおそらく、

「母上！ 有利は僕の婚約者です！ チャンスなどありません！」

「あらあ、そうだったわねえ。ざーんねん」

「あはは……お元氣そうで何よりです」

おっと、魔王ご一行の登場だ。

ツェリ様の妄言に飛び込んできたヴォルフラムを先頭に、コンラッドとギュンター、そして渋谷とその娘、つまり真魔国の王女であるグレタも来たようだ。娘と言っても養女であり、見た目は小学生

妹と気が合いそうだ。

どうやらこれで全員集合らしい。総勢十六人の大宴会の始まりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4372l/>

今日からマのつくSOS団！

2010年11月27日01時40分発行